

親との死別を体験した人に関する研究

— 父親を亡くした人の語りから —

早 田 幸 子

問題

本研究では、小此木(1979)でいわれている「第一に近親者の死や失恋をはじめとする、愛情・依存の対象の死や離別」の中でも“近親者の死”に焦点を当てて研究を行った。

愛する者との死別は誰もが経験するライフイベントであり、決して避けることはできない。大塚(2008)は、年齢に関係なく愛情・依存対象の喪失が最もつらいと感じる傾向があることを示唆している。死別体験は家族に対して、生物学的・心理的・社会的影響を及ぼすストレスの基をなす(バーネル, 1994)と考えられており、廣岡・大橋(2004)によれば、死別は「その他のストレスイベントと比べ、予期できない場合が多い」とされている。

喪失の後に共通してみられる多様な感情や行動を悲嘆と呼ぶ(ウォーデン, 2011)。また、バーネル・バーネル(1994)は『悲嘆 (grief)』は、死による喪失から生じる強い感情ないし情緒的な苦しみである」としている。

白井(2012)によれば通常の死別後の反応は“病的”なものではなく、「死別から半年～1年程度で通常の生活に適應することが出来る場合が多い」としている。瀬藤(2012)によれば、正常な悲嘆は治療の必要はなく、介入によってエンパワメントの低下、不要な個人的・社会的コストを発生させる危険性があることを示唆している。

一方で“複雑性悲嘆”は、病的な悲嘆といわれており、山本(1997)によると病的な悲嘆とは、悲哀の仕事 (mourning work) が機能不全に陥ることで、悲哀が滞り、異常な経過を辿るなどして悲嘆の状態が複雑化し、乗り越えるのに困難な状況に陥っている場合であるとしている。

ハーヴェイ(2003)は、あらかじめ死を知ること、遺される者は死に対して心理的な準備を十分にすることができるとし、「あらかじめ死を予期することが、喪失の程度と深さに対処する人の

能力の手助けになろうがなるまいが、喪失による初期のショックを軽減させるであろう」としている。

ハーヴェイ(2003)によると遺された子どもは、両親の死について情動面と認識面で多くのことを共有していなかったことに対する後悔の念を抱きやすいことが示唆されている。また、成人している子どもが親を喪った場合、その子どもが親と理解し合う機会を十分に持つことや、親が満足 of いく人生を送ることができたときには、他の喪失よりは悲嘆の衝撃は幾分か小さくなる場合があると述べている。

ウォーデン(2011)は「死別後、2年が過ぎても、子どもたちの半数は、生き遺った親の安全を心配していたが、この心配を引き起こしたのは、死が突然訪れたことではなく、むしろ残された親が調子を崩していることであった」と述べており、親との死別による悲しみとは別に、悲しみに暮れる親の姿を見ることが、子どもに影響を与えているのである。

また、ボウルビィ(1980)は、親の喪失に対して「病的な悲嘆」を呈する成人について「親と密接な関係を持っていたと考えられる」と述べている。

キューブラー・ロス(2001)は、子どもが親の死にどう反応するかは、その子供がどう育てられたかによって違ふとし、ペットの死や祖父母が亡くなった際に、両親が子どもを保護・隔離してしまわずに、気持ちを分かり合った場合や、一方の親に死が近づいている時に、もう一方の親とともに家で世話ができた場合、そして、葬式に参列することを許されていた場合には、両親との死別において心配ないと述べている。

目的

本研究では、親との死別を経験した人の語りを通じ、経験者はどのような心理的過程を経て大切な人の死を自分の中で意味が了解できるものとし

てきたのかということについて検討することを目的とする。また、父親の死が、それを経験した人にとってどのような経験であったかを個別性に重点を置きながら考察していく。

方法

調査方法：父親との死別を体験した人への半構造化面接。

調査時期：平成25年8月～10月

調査協力者：父親との死別を体験した20代の女性3名。死別後の期間は4年～8年である。

手続き：研究協力を依頼し、日程の調整を行った。インタビューの趣旨、倫理的配慮について記載した『研究協力依頼書』をインタビュー前に対面で紙面を用いて説明し、理解と了承を得た後に署名を求めインタビューを行った。

分析方法：現象学的アプローチによる分析を行う。

結果と考察

父親を喪失するという経験をした人の語りから〈父親を亡くしてから現在まで〉という気持ちの変化が研究協力者それぞれに見られた。そしてその中に、〈気遣い〉〈準備期間〉〈死を受け入れる〉〈自立〉〈父親の存在の捉え直し〉という5つのテーマが現れた。

〈気遣い〉父親を亡くしたあと、学校や職場などの今まで生活していた日常に戻ると、周囲から気を遣われるという経験をする。そのような状況の中で人に気を遣われたいと父親を亡くした人たちは感じていた。しかし、相手から気を遣われず、父親のことについて詳細に尋ねられた場合には、自分自身が傷つくことを予期しており、一概に気遣いが不要なものだとは言えないことがと考えられる。

〈準備期間〉父親の余命を知った時からすでに、父親を喪うという経験は始まっていた。そしてその準備期間は、父親の死を受け入れたくない自分を納得させようとする期間でもあり、父親にとっても準備期間である。そのため父親が生きる希望を語る姿を見ながら、心の準備をすることは、準備期間自体へのためらいを生じさせると考える。

〈死を受け入れる〉父親を喪失するという現実と葛藤し、向き合いながら自分なりに父親の死に対して意味づけをすることで、受け入れ難い現実の意味を持たせ、父親を喪うという出来事から何を得たか模索していることが語られた。ある日突然、

父親の死を受け入れられるわけではなく、父親がいない日々を経験することの積み重ねが気持ちを整理するために重要であり、そういった体験を経て父親を喪失するという体験を受け入れることができるようになっていくと考える。

〈自立〉父親を喪うという出来事は、一家の大黒柱を喪うということである。遺された母親だけで自分を養えるのだろうか、母親に負担はかけたくないという父親を亡くして感じたのである。経済的な負担をかけることへの不安は、就職することでやっとな解消された。また、すでに社会人で父親を喪った場合、経済的には自立していたため、親に心配をかけないようにと、精神的に自立できていたかを自分に問い直す機会となったことが考えられる。

〈父親の存在の捉え直し〉成長によって父親という存在が変化することと、喪失を経験したからこそその父親の存在の変化は異なるものであると考える。彼女たちが、父親の存在を捉え直した背景には、時間の経過、彼女たちの成長、今日まで父親の死と向き合ってきた経験が合わさって、父親の存在が持つ意味が変化していくのだと考える。

総合考察

父親を亡くすという経験は、父親がいるという今までの経験の積み重ねが、ふいに崩されるということである。父親が亡くなった場面について父親との喪失を経験した人が話しているとき、その語りの中の出来事はその人の目の前にありありと存在していた。本研究で現れたいくつかのテーマは、父親を喪失するという経験だけに視点を置くのではなく現時点での語りから見えてきたものである。例えば、現在の彼女たちが、父親の死を「運命」だと意味づけているから、その人にとって父親の死は運命であったということではなく、「運命」だと意味づけるまでにどのような過程があり、どのような経験をした上で、「運命」だと意味づけることが出来たのかを含め、彼女たちの語りから、父親の喪失という経験が彼女たちにとってどのような経験であったかが見えてきたのである。また、父親を喪失するという経験を語ることで当時の自身の感情を再認識することが出来たのではないだろうか。そして父親を亡くすという経験ををした人が、どのような過程を通り気持ちを整理してきたかを確認する機会になったことが考えられる。